

〈特集〉「景福寺資料」の学際的研究  
——東南アジア研究における文献資料の新たな活用に向けて——

序——特集に寄せて——

大野 美紀子\*

**Interdisciplinary Study of Canh Phuoc Temple Collection:  
For the Development of a New Approach to Document Research  
in Southeast Asian Studies**

**Introduction**

ONO Mikiko\*

**Abstract**

This paper aims to introduce the contents of Sino-Nom scriptural materials, known as the Canh Phuoc Temple collection, and new research perspectives for Southeast Asian studies by using those religious materials. The Canh Phuoc Temple collection consists of 98 pieces of religious material written in Sino-Nom scripts from the late nineteenth to the twentieth century. The collection was found at a Vietnamese Buddhist temple in Bangkok and brought to Japan in 1979 by the late Yumio Sakurai, a Vietnamese history scholar.

Scholars of paleography, Asian history, linguistics, and other disciplines conducted a joint interdisciplinary study after forty years, in which they surveyed the materials in terms of both textual and physical characteristics using the latest documentary research methods.

The characteristics of the Canh Phuoc Temple collection are as follows. First, the collection is a mass of original materials held at one temple, Canh Phuoc Temple. Therefore, the collection gives us rich information about the activities at a Buddhist temple as well as the monks and laypeople associated with it. Second, it contains rich information about the process of generation of the documents, and helps us to investigate the spread and acceptance of Chinese Mahayana Buddhism from East Asia to Southeast Asia. Third, the collection includes several sutras established in China. Thus, it provides a clue to the

---

\* 京都大学東南アジア地域研究研究所 : Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University  
e-mail: onomkk@cseas.kyoto-u.ac.jp  
DOI: 10.20495/tak.60.1\_5

transformation and spread of Chinese Mahayana Buddhism since the Ming Dynasty, which combined the Jodo and Zen sects and incorporated Confucianism, Taoism, and folk religions.

In the joint interdisciplinary research, both textual and physical characteristics were examined with regard to the original documents. The research results are reflected in the two articles and the bibliography in this special issue. The first article is an analysis of all the documents of the Canh Phuoc Temple collection, while the second is an analysis of the Sino-Nom scripts in the sutra and the bibliography.

The survey results of the Canh Phuoc Temple collection are expected to contribute to the following research issues for Southeast Asian studies in the future: research on Chinese Mahayana Buddhism and Vietnamese Buddhism, a local sect of the Mahayana tradition; the spread of Chinese Mahayana and Vietnamese Buddhism to Theravada Buddhist societies by overseas Vietnamese in Southeast Asia; research on the physical characteristics of documents in Southeast Asia.

### はじめに——本特集の趣旨

京都大学東南アジア地域研究研究所には、「景福寺資料」と呼ぶところの完本・端本および断簡・紙片全98点から構成される資料が保管されている。内容は、主として版本・手写本の漢字字喃（チューノム, Chữ nôm）仏經典（以下、漢喃（ハンノム, Hán nôm）仏經典）から構成され、資料成立年代は19世紀から20世紀半ばと推定されている。

資料名の由来は、当該資料が発見されたタイ国バンコクに所在するベトナム仏教寺院の景福寺<sup>1)</sup>（ベトナム語名 Chùa Cảnh Phước, タイ語名 Wat Samananam Borihan）に拠る。タイ国の大乘仏教は、華僑・華人系（Cinnamnikai, 華宗）とベトナム系（Annamnikai, 安南派, 越宗）の2派に大別され、後者は18世紀のベトナム移民によってもたらされたベトナム仏教を起源としている。景福寺の建立起源は19世紀初のラーマ三世期に遡ると言われており、1875年ラーマ五世によって安南派大乘仏教寺院として承認された [Thanyathip 2022: 3-7]。同寺は、バンコク王都城壁外のクメール人・モン人・ラオ人・マレー系ムスリムが居住していたナーンルーン地区に立地し、近接してソム・キン（Xóm Kinh, ベトナム人の村）と呼ばれるベトナム人集落があった。ナーンルーン地区は、19世紀中葉に王都域が拡大し新たに開削されたパドゥンクルンガセーム運河を利用した船運が盛んになると、ベトナム人や華僑・華人、マレー人など様々な民族が流入し、同寺の門前町にはベトナム人と華僑・華人による製材所や家具屋・紙冥器屋が並んでいた [同上書: 117, 129]。すなわち、「景福寺資料」は、ベトナムからタイへの移住者（越僑 Việt Kiều）と彼らによって中国からベトナム経由で東南アジアにもたらされた大乘仏教伝播の歴史を物語る重要資料と言えよう。

1) ベトナム語漢字音表記では景福寺の正式名称は「勅賜鎮國景福寺」、臨濟正宗天童法派を名乗っている [桜井 1979: 76]。

この「景福寺資料」がバンコクから京都大学東南アジア地域研究研究所（以下、「東南地域研」と略記）に将来されたのは1979年、同研究所の前身である東南アジア研究センターに当時在籍していたベトナム研究者桜井由躬雄によってであり、その後すぐ『東南アジア——歴史と文化』誌掲載の論考〔桜井1979〕によって日本国内に紹介された。<sup>2)</sup>しかしながら、後述のように、その後近年に至るまで、当該資料は図書室に「埋没」し、公開されてこなかった。

「景福寺資料」は、大乘仏教のみならず、道教や民間信仰を含む包括的な宗教資料である。資料数にして全98点であるが、<sup>3)</sup>その内容は仏教・道教経典や祭文と多岐にわたり、また保存状態も悪い。そのため、第II章に述べる2017～21年に実施された「景福寺資料」共同調査は困難を極め、未だ資料の内容に立ち入った本格的な学術的考察を行える状況には達していない。にもかかわらず、ここに「景福寺資料」に関する特集を組む理由は、当該資料の情報を公開することによって何よりもまずその存在を広く斯界に知らせ、今後の研究が喚起されることを願うからである。

本特集は、特集の最後に添付する「景福寺資料目録」のほか、「景福寺資料」を素材にして執筆された研究論文2編を加えて構成するものである。以下、本稿では、第I章で「景福寺資料」の特徴ならびに当該資料を使った大乘仏教研究の展望を示し、第II章で2017～21年に行われた共同調査を紹介し、第III章で本特集に収録した2編の論文の概要と意義、および「景福寺資料目録」について解説する。

## I 「景福寺資料」の特徴と当該資料を使用した大乘仏教研究への展望

本章ではまず、「景福寺資料」の特徴をいくつか指摘する。そのなかには、第II章で述べる共同調査によって明らかになったものも含まれる。

特徴の第一は、当該資料が景福寺という出所が確実な一寺院内に所蔵されていた経典等オリジナル資料の塊であり、景福寺に縁をもつひとびとによって同寺にもたらされたか、あるいは同寺内で生成された資料ということである。景福寺経蔵から運び出された際に桜井による選定意思が反映されている可能性は留保されねばならないものの、その経蔵内部に集積された宗教資料構成の再現が可能であると思われる。

寺社等宗教施設が所蔵する資料が図書館・文書館によって収集・所蔵される例は少なく、また日本・台湾など東アジア地域において仏寺経蔵調査が行われてきているが、その詳細が公に

2) 桜井論考では、景福寺の成立と同寺所蔵漢字喃文献の史的価値を解説し、史料紹介として「目録」〔桜井1979: 80-114〕が付されている。

3) 「景福寺資料」は、物理単位（冊子あるいは折本として一つのまとまり）としては98点であるが、そのなかに合綴されたものを含むため、タイトル数としては100点となる。

されることは多くない。景福寺が所在するタイ国内の大乗仏教寺院やベトナム国内の仏寺においては、所蔵資料一部を閲覧するに留まり、経蔵内部は公開されていない。<sup>4)</sup>したがって、数少ない宗教資料を利用した先行研究例も、各地から集められた、すなわち生成された場から引き離された断片的な資料を対象とする調査であった。それに対し、「景福寺資料」の調査では、一寺内に所蔵されていた資料が塊として扱えることで、仏教寺院という場の再現性が高まることが期待できる。

臨済宗仏画を研究する花園大学・鄭美景によれば、「景福寺資料」の塊を通観すると、当該資料に含まれる寺院所蔵経典が用途によって素材・形状を異にしており、上質・大判・装画の大判サイズ仏伝は説教用に、字喃・タイ文字が付与されたものは僧侶の日常読経用にと、使い分けられているという。<sup>5)</sup>この指摘は、ひとりの調査者が、資料全体を塊として俯瞰し、仏寺の営為が経蔵所蔵資料の構成に反映されていることに気づいた事例と言えよう。

共同調査では、同一タイトルの経典を手にとって比較照合し、手ずれによるケバ立ち程度・裏打ち補修などの物性情報による使用頻度を分析した。また、使用者を類推する手がかりとして字喃・タイ文字・ベトナム文字のヨミの有無についても、参加者の中で議論が交わされた。

字喃・タイ文字・ベトナム文字のヨミは、経典使用者の言語背景や使用された時代を探索する手がかりとなる。少なからぬ量の字喃訳経典資料や、また字喃、クオックグー、タイ文字のヨミが付された資料からは、景福寺の19世紀前半～20世紀半ばまでの長い歴史の中で、同寺所縁の越僑が世代を経てタイ社会へ同化してゆき、そのなかで母語を喪失してゆく様子を伺い知ることができる。<sup>6)</sup>また、「景福寺資料」にはタイ国華僑・華人刊行による経典類も含まれており、上座部と大乗仏教の両方に渉る「タイ人仏教徒」の信仰行為を再検討する潜在的価値も持っているとも言えよう。<sup>7)</sup>

特徴の第二は、「景福寺資料」の中に、「重刊」とその経緯を説明する序跋が少なからず含ま

4) ベトナムでは1980～90年代に「史料革命 Tài liệu Cách Mạng」と呼ばれるほど、地簿<sup>じかた</sup>等の地方文書やグエン朝宮廷文書硃本(châu bản)などの一次資料が次々に発見され、図書館・公文書館に収集された[桜井1994:158]。しかし、神勅・神蹟を除く宗教文献は収集されてこなかった。例えば、フランス極東学院およびベトナム国家図書館などの収集に係る漢喃文献目録では、子部1,529種のうち仏経典は314種、全点5,038種の6%に過ぎず、道教與俗信(道教、降筆文、神勅、その他を含む)393種より少ない[劉春銀ほか2002: xii-xiii]。

5) 2017～18年にかけて、「景福寺資料」と大蔵經との比較照合調査を行った鄭美景からの口頭による教示に基づく。

6) 景福寺住職は、初代から3代まではベトナム人、4代および現在の5代はタイ人であるが、2人のタイ人住職がベトナム系か中国系かは不明である[Thanyathip 2022: 10-12]。越僑は2世以降急速に母語を喪失しタイ語を使用する傾向が指摘されている[Thanyathip 2004; Poole 1970]。

7) タイ社会における宗教と民族の関係を研究する片岡樹は、「(上座部)仏教サンガが唯一の焦点として析出されてきた結果」のタイ仏教社会観に対して、民族籍を不問とし帰属宗教を申告するタイ国民統計上の「タイ人仏教徒」には華僑・華人に代表される中国系大乗仏教信徒が含まれる実態が反映されていないと批判している[片岡2014]。

れている点である。東アジア地域における漢字仏經典刊行では、韓国・日本の高麗版大蔵經刊行例が代表するように、中国本土の仏寺が刊行した版本を将来し、それを元に版木を起こし再刊する「重刊」が盛んに行われた。したがって、「重刊」は仏經典の伝播と系譜を明らかにする意味で極めて重要な情報となる。中国や韓国における国家による經典刊行事業とは異なり、ベトナムでは個人や寺院による刊行事例が多いという〔宮嶋 2020: 155–172〕。いち早く「景福寺資料」の重刊に着目し、18世紀中国—ベトナムの仏教交流史を裏付ける価値ある資料として高く評価したのは大西和彦である〔大西 1985: 69–94〕。大西は、「景福寺資料」の中にある『重刊沙弥律儀要略増註縁起瑣言』の序跋に記されている「海幢寺」に着目し、中国・ベトナム両国史料の同寺に係る記述と照合し、18世紀ベトナム南部と広州の海幢寺との間に交流があったこと、19世紀ベトナム阮朝重臣が仏教活動のひとつとして、海幢寺版仏經典の重刊事業を行ったことを明らかにした。

經典刊行に係る経緯については、桜井も注目していた。そのため、桜井論考の目録（以下「桜井目録」と略記）では写本の筆写者名を付記し、当該資料の出版者を探る調査分析の可能性を示唆したが〔桜井 1979: 80〕<sup>8)</sup>「重刊」「仏説」を接頭辞としてタイトルから省略していた。本特集末に付した「景福寺資料目録」では、この不備を修正し、「仏説」をタイトルの一部として採録している。

さらに、共同調査においては、複数の仏教学研究から、經典寄進者名が刊本の中の各図絵にも記載されており、それが複数名による經典の寄進・刊行の証左となることも指摘された。すなわち「景福寺資料」は、刊本・写本のいずれにおいても、經典刊行・作成の経緯を物語る情報を豊富に含んでいる。そして、資料の出所元が特定されていることで、資料の生成に関与してきた当事者を探索することが比較的容易である。

特徴の第三として、「景福寺資料」には、中国で成立した經典類が多く含まれている点が挙げられる。このことは共同調査で指摘され、明代以後の中国系大乘仏教の流れに沿うものと推論されていた。後述するように、「景福寺資料」から採録したタイトルと大蔵經に収録されている經典名との照合を行ったものの、残念ながら全点照合に至っていない理由はそこに起因する。「景福寺資料」の写本には、中国で成立した複数の經典から文言を引用し、1冊の写本を構成する例が、少なからず見られる。そのため、引用元を探すことも、大蔵經に収録される正典との照合も困難であった。しかしながら、これらの特徴こそが、景福寺における仏教営為を語るものであり、本稿のまとめにおいて、その研究上の価値を詳述したい。

上述の事情により、「景福寺資料」は、デジタル版大蔵經を利用した經典テキスト照合に加えて、今後もデジタル化經典資料類を駆使した、さらなるテキストクリティークが必要とされ

8) 写本の末尾には、筆写者名とその経緯や所蔵者印「孟蘭」「源蘭」「覚蘭」等師家の系譜を語る情報も含まれている。

る。すなわち、「景福寺資料」の活用には、デジタルヒューマニティーズ研究手法の積極的な利用が期待される。

明代以降の中国系大乘仏教は、それ以前の主流であった禅宗に浄土宗を加えた新しい民衆型仏教として東アジアへ普及し、その影響はベトナム仏教にも及んだことが知られている。しかし、ベトナム国内の仏教研究例は少なく、また仏教資料へのアクセスも難しいため、これまでの研究は主として中国資料に依拠したベトナム仏教史概説に留まってきた〔石井 2010〕。ベトナムが東アジア漢字文化圏の一角を成すことから、近年東アジア仏教史から中国系大乘仏教の一角を占めるベトナム仏教へ関心が寄せられている。例えば、「景福寺資料」に含まれている『釈氏源流』・『二十四孝』については、すでに東アジア地域内における仏伝文学の系譜比較〔小峯 2014〕や字喃・ベトナム語版との比較考証〔佐藤 2017〕の研究例がある。また、上述したベトナム国内寺院調査をもとにした仏經典刊行研究の事例〔宮嶋 2020〕なども挙げられる。

「景福寺資料」を利用することで、上述の東アジア地域に限定された中国系大乘仏教研究の視座を、東南アジア地域へと広げることができると思われる。ベトナムを経由して、ベトナム仏教と、中国系大乘仏教のそれぞれが、東南アジア大陸部上座部仏教圏へ伝播していく過程について、また、東南アジアにおける中国系大乘仏教の伝播者に華僑・華人だけではなく越僑をも加えた、中国系大乘仏教の東アジア―東南アジアの広域における伝播と受容状況についての研究の可能性が開かれるであろう。

そうした中であって、「臨済正宗天童法派」を名乗る〔桜井 1979: 76〕景福寺は、例えば『禅門日誦』など臨済禅宗系の仏經典類のほか、阿弥陀浄土教（蓮宗）系の仏經典類を所蔵する。また、桜井によると同寺は「タイ民衆の間では霊媒術による fortune teller の寺としても有名」であり、「僧侶の心覚えに用いられた手帖類、占星術、易関係の書、写経奉納文の例文」、さらには道教系經典や祭祀文破片も含まれている〔同上論文：78-80〕。このことから、「景福寺資料」を仔細に調べることで、明代以後中国大乘仏教が、禅宗に浄土宗を加えさらに民間信仰や儒教・道教をも取り込みながら民衆へ普及していった流れについての、新しい研究情報が多く得られると考えられよう。

## II 「景福寺資料」共同調査に至る経過

次に、2017～21年に行われた「景福寺資料」の共同調査について述べておこう。

共同調査は、2013年、散逸していた資料の一部が東南地域研に返還されたことを契機として始まった。

まず、共同調査が始まる前に行った当該資料の整理・保存・照合等の諸作業は、以下の通りである。

当該資料は、40年の長期にわたり半ば放置され、また何度も移動を繰り返したため、一部の資料は上・中・下巻のセットもバラバラとなり、段ボールに入ったまま何らの保存処置も講じられていなかった。図書室では、さらなる散逸を防ぐため、まずは資料を1点ずつ中性紙封筒に入れて応急の保存措置を講じた後、状態に応じて資料のデジタル化を行った。

2017年から古文書資料の整理経験が豊富な司書・古川千佳に依頼して、デジタルデータと現物を照合しながら各冊の書誌情報リストを作成し、翌2018年から仏經典翻刻経験の豊富な鄭美景が、デジタル版大蔵經と照合しながら、あらためてタイトルと經典名の照合を行った。しかし、そもそもタイトルを欠く資料が多いため照合が難航し、全点のタイトル確定に至っていない。

上述の作業と並行して、当該資料の資料評価根拠<sup>9)</sup>を確定するため、現物にある蔵書印等の旧蔵者情報を確認し「景福寺資料」が景福寺に由来することを証明する作業を行った。その結果、東南地域研に保管されている漢喃仏經典を主とする資料は、桜井が紹介した「在泰京越南寺院景福寺所藏漢籍字喃本目録」資料の一部と判定された。その判断根拠は、1. 当該資料の中に「景福寺蔵<sup>10)</sup>」印をもつ資料9点が含まれていたこと、2. 桜井 [1979] で紹介されている資料と同定された82点が含まれていたこと、3. 資料のうち1点は、研究所の一角に長年展示されており、添えられた説明書きに景福寺由来を記すメモが添付されていたこと、である。

現物資料と「桜井目録」との照合作業は、実際には極めて困難なものとなった。桜井は、景福寺でその借覧を許されて293種の目録を作成したと記しているが、「桜井目録」上のタイトル数を数えると307点と齟齬があった。また、うち147種14,000頁のマイクロフィルム化を行ったと記されているが [桜井 1979: 73],<sup>11)</sup> 残念ながら東南地域研には、そのマイクロフィルムが現存していなかったため、「桜井目録」のどの資料が将来されたかの情報がなかった。加えて、現物資料も「桜井目録」もタイトルを欠いているものが多いうえに、また「桜井目録」では資料のどの部分からタイトルを採録したかも確定できなかった。以上により、現時点では、「桜井目録」上の全307点のうち82点が、東南地域研にある現物との照合ができていないに過ぎない。すなわち、「景福寺資料」は桜井が1979年に紹介した資料の一部にあたるものと考えられるが、

9) 日本国内図書館の資料評価では、1820年以前の刊行、あるいは特別な由来をもって貴重書選定基準とすることが多い (<https://www.ndl.go.jp/exhibit60/summary.html>, 2021年11月19日閲覧)。単純に成立年代を基準として東南アジア地域資料を評価すると、手写本を除く多くの資料が、貴重書の範疇から外れることとなる。「景福寺資料」も、書誌情報から判断する限りでは国内に所蔵されている中国經典資料と同一の刊本が含まれており、資料状態から一見して19世紀後半～20世紀前半と推定されたため、図書室で受け入れた当初は、手写本を除き総じて希少性が薄いと判断されていた。

10) 「勅賜/景福寺」とその周囲にタイ文字大型円形朱印、「勅賜鎮國景福寺」の墨書、印記：「[勅賜]/景福寺/[白橋]」印の3種が判別されている。また、景福寺と同じくバンコクに所在するベトナム仏教寺院の「會慶寺」や「翠岸寺」の印が付されている資料も含まれている。

11) 「桜井目録」凡例で、「マイクロフィルム化したものについては、(M)の記号をつける。」とある [桜井 1979: 80]。

桜井が紹介していない資料も含まれている可能性がある。

次いで、「景福寺資料」の由来と関連する資料の成立年代と成立地に係る調査については、日本古文学と東洋史の研究者から、当該資料の料紙悉皆調査が提案された。当該資料は、景福寺内から発見され、そのまま本邦に将来されたものであり、部分的には修復の手が入っているものの、比較的原形を保ったオリジナル資料である。それに着目し、資料全点の料紙を悉皆調査し年代測定を行うことで、一寺に蓄積されてきた文書の積層年代を分析できるのではないかと、また使われた紙の分析を通じてアジア広域におけるモノの流通の研究に一石を投じることでもできるのではないかとの考えからである。日本古文学では1990年代以降、光学顕微鏡を使用した非破壊調査<sup>12)</sup>によって料紙調査を行う物性研究が盛んとなってきた。「景福寺資料」の料紙調査は、この最先端の物性調査手法を東南アジア地域文献に応用する嚆矢となるであろう。近年デジタル化による資料保存・公開が急速に進む中でテキスト研究の優位性が高まっている。そのような中で、本共同調査は、東南アジア研究に対して、オリジナル資料が有する物質情報を重視した物性研究の有用性を問いかける契機とも成り得よう。

かくて2017～21年にかけて6回にわたり、「景福寺資料」の保存措置検討を兼ねた共同調査が行われた。当該資料が漢字文献を主体とすることを考慮して、日本史・東洋史研究者に声をかけ、清水政明、小島浩之、矢野正隆と筆者が中心となって組織したものである。当該調査では、日本古文学の富田正弘、本多俊彦、林譲、日本対外関係史の藤田励夫、製紙技術の大川昭典、中国道教史の都築晶子、文化財科学の高島晶彦、小山萌、西洋書誌学の床井啓太郎、森脇優紀の各氏（敬称略）に積極的に参加いただいたほか、ここに尊名を逐一掲げないが毎回多くのゲスト研究者にお立ち寄りいただいた。ここでの成果が、本特集に収録されている2つの論考と資料目録に結実している。

### III 各論考紹介

本章では、本特集に寄せられた2つの論考と「景福寺資料目録」について掲載順に紹介する。冒頭で述べたように、両論考および資料目録のいずれも共同調査を経て得た知見に基づくものである。

第1論考は、小島浩之・矢野正隆両氏による「漢字・字喃經典への料紙調査の応用」と題するもので、「景福寺資料」全点に対して日本古文学調査手法である光学顕微鏡を用いて行っ

12) 図書館等における資料保存は、本来、物性調査結果をもとに保存対策が講じられるべきである。しかし、従来の物性調査が資料の破壊を伴わざるを得なかったため、資料破壊を招く懸念から物性調査を拒否する姿勢が広くみられる。デジタル保存して事足りるとする傾向が近年国内図書館・図書館においても強まっている。

た料紙調査の分析結果である。桜井 [1979] の報告後現在に至る約 40 年間に於いて東南アジア研究で利用可能となった文献資料は、国内外において収集・デジタル化が進展し、さらに 1990 年代以降東南アジア諸言語の文字コード標準化によって、コンピューターによる資料情報の公開・検索が容易となったことも相俟って、膨大な量となっている。一方で、研究手法の主流は依然としてテキスト主体が一般的である。そのなかでオリジナル資料の物質情報に着目したマテリアルベースの研究手法が、新しい研究の地平を開く可能性は大きいと思われる。ベトナム宗教資料については、仏經典とは異なるものの、すでにベトナム神勅の物性調査というマテリアルベースの研究が試みられている [矢野 2016]。<sup>13)</sup> そもそも本特集の契機となった共同調査は、マテリアルとしての資料分析を試みた矢野の研究に触発されたものである。第 1 論考は、東南アジア文献に対する同手法活用の嚆矢として、近代東南アジア地域の紙を研究する上での基礎データを提供する。第 1 論考では、東南アジアの製紙・印刷技術や料紙・布等モノの物性データの研究が未だ蓄積されていないため、日本ほかの先進的な調査事例との比較研究に進むことができなかった。文献資料のモノとしての情報を調査し、19～20 世紀アジア広域における製紙・印刷業態の基礎データを蓄積することが必要であり、今後さらなる物性調査例が出てくることを期待する次第である。<sup>14)</sup>

第 2 論考は、清水政明氏による「漢喃版『佛説天地八陽經』に見る字喃の方言性」である。桜井も字喃訳解本の好例としてとりあげた [桜井 1979: 80] 漢文・字喃対訳仏經典『佛説天地八陽經』について、字喃に示される方言の特徴を分析したものである。ベトナム語方言については、方言辞書編纂が行われているものの、未だ定番となる方言辞書や十分な調査結果はない。そのなかで、清水氏の現地調査によって得た方言例とベトナム国内における方言研究の発展に関する知見をもとに、北米在住ベトナム人を中心に開発されてきた字喃データベース Nôm Lookup Tool も利用して、字喃に見られる方言分布を分析した。その結果として、『佛説天地八陽經』の字喃訳者は現在のベトナム中部フエ以南の出身者と推定されるとの結論に至っている。桜井 [1979] は景福寺境内のベトナム語墓碑銘を分析し、南部出身者が多いとの予想に反して北・中部出身者が多数を占める結果を得たことから、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて

13) ベトナム諸王朝には、国家権力による地方支配の象徴として、皇帝が地域の神々に位階を授けて冊封する慣行があり、その際に交付される勅書が神勅である。神勅には祀られている地域と神々が詳細に記載されているため、民間信仰の実態を研究する手がかりとなる。日本では高津茂による北部村落における祭神の神格に係る研究がある [高津 2010]。

14) 島嶼部のイスラーム写本調査例では「European Rag Paper」(ヨーロッパ製ほろ紙)・「Chinese Handmade Paper」(中国製の手漉き紙)・「Dluwang or Javanese Tree Bark Paper」(樹皮紙)・「Mass-produced Ruled Paper」(機械製紙)と紙の種類を分類している [Kawashima 2019: 174–187]。「景福寺資料」中の仏經典に限らず、島嶼部イスラーム写本においても中国製の手漉き紙に分類される型の紙が用いられていることから、東南アジア地域で発見されているこの種の宗教文献に使用された「紙」をより詳細に分類・調査することができたら、東西を結ぶアジア広域におけるモノのネットワーク解明に貢献するものと思われる。

のベトナムからタイへの人口移動の理由について、Poole<sup>15)</sup>が挙げた政治亡命ではなく、ベトナム国内の絶えざる人口圧によって北部から中・南部そしてタイへと人口移動が及んだ結果という仮説を提示した〔同上論文：77-78〕。景福寺の長い歴史の中で、僧侶や信徒といった同寺に所縁をもったひとびとが多様な出自と経緯をもっていたことは想像に難しくなく、「景福寺資料」と同寺境内墓碑群との関係については、今後のさらなる研究を俟つ必要がある<sup>16)</sup>。

従来の字喃研究は、字喃が公文書に使用されることが少ないため、文学研究の範疇で研究されてきた。それに対し、桜井は「景福寺資料」という「文学よりさらに民衆に根付いていたはずの仏教信仰の場における字喃資料の大量の発見」〔同上論文：80〕が、爾後の字喃研究に果たす役割は大きいこと、そしてベトナム仏教の特徴として字喃訳経典を用いた平易なベトナム語説法であると述べていた。第2論考は、ベトナム語研究を歴史研究に応用することで、字喃経典の伝播経路を避諱と字喃方言によって特定する新しい研究手法を提起するものとなっている<sup>17)</sup>。

本特集末尾には、「景福寺資料」の資料目録を収録している。この「景福寺資料目録」には当該資料の共同調査結果を反映し、本特集の主眼である「景福寺資料」利用による東南アジア研究の発展を促すべく、各所に工夫を凝らした。漢字排列を採用し、「桜井目録」との照合結果や漢語・ベトナム語・タイ語の引用・印記等の情報を収録することで、ほかの仏経典類との比較研究を容易にしている。その詳細については、凡例を参照されたい。

### おわりに——今後の展望

「景福寺資料」という宗教文献が誘う研究対象はあまりにも巨大である。「景福寺資料」の主体を成す漢喃仏経典類を利用して、中国系大乘仏教とその一角を成すベトナム仏教そのものの本質に迫ろうとする我々の試みは、無論、本特集で完結しえぬどころか、未だ調査研究の途上にある。そのなかで、漠然とながらも見えてきた特徴を踏まえ、今後の研究の展望として、主に東南アジア研究の観点から以下の方向性を挙げておきたい。

- 
- 15) タイ国内の越僑社会をはじめて系統的に研究したPooleは、同国における越僑定住について、18世紀末から19世紀中葉にかけてのベトナム国内の政治的対立と宗教弾圧、19世紀後半以降のフランス植民地化とインドシナ戦争を挙げ、政治的要因がベトナム人のタイ移住を促したと述べている〔Poole 1970: [23]-35〕。
- 16) 第一次インドシナ戦争期にタイを中心とする東南アジアにおけるベトナム独立運動を研究したGoschaは、当該時期のタイーベトナム間のヒトと物資の移動経路として中部ーラオスー東北タイルートと南部ータイ湾岸ルートを挙げ、これら二つのルートが必ずしも独立運動で連携していなかったことを指摘している〔Goscha 1999〕。
- 17) 字喃研究と仏教研究を結ぶ研究例としては、第I章で引用した佐藤トウイウェンによる字喃版『二十四孝』伝播経路の比較考証がある〔佐藤 2017〕。

本特集に収録している「景福寺資料」共同調査成果は、東南アジア研究における宗教資料利用の可能性を示している。共同調査前には、同資料が漢字仏經典を主とする宗教資料であるため、一見すると經典のテキスト本体が伝える内容は他の東アジア地域で刊行されている同種の經典と大きな差異は見られないと思われていた。しかし調査過程において、「景福寺資料」の中に、經典類の筆写・刊行の作成経緯や継承・寄贈経緯が記され、それに関わった僧侶や信徒・代書者の作成者情報が付記されていることが判明した。それらの作成者情報から辿る景福寺に縁をもったひとびとには、タイ在住ベトナム人（越僑）に留まらず、タイ在住華僑・華人、またタイ化した華裔・越裔と思われる情報が含まれていた。また彼らの出身・経由地としてベトナム南部やカンボジアの広域にわたる地名が挙がった。<sup>18)</sup> すなわち、漢字經典が中国から東南アジアへと伝播していく中で重刊・筆写された際に、作成者とその経由地である出版者・出版地の情報を取り込んでいくことが証明され、このような宗教資料が広域におけるモノとヒトの流通経路を検証する研究資料となり得ることを示している。

そして、日本・ヨーロッパの教会・寺社の過去帳が長期人口動態の研究資料として利用されるように、文献資料が保存され難い東南アジアにおいても、寺社・教会が異例とも言える長期にわたる資料の蓄積保存がされている場であることを、あらためて我々に認識させた。

また、「景福寺資料」共同調査は、オリジナル資料を研究することの重要性を示した。「景福寺資料」は幸いにもほぼ原形を留めた状態のオリジナル資料が本邦に将来されたことで、手ずれ・ケバ立ちといった文献の使用頻度や裏打ちに使用された暦など経由地を示唆する情報、鉛筆書きのタイ文字ヨミやメモなど、いずれもデジタル資料では読み取り難い情報を、現物から読み取ることができた。

バンコク在ベトナム仏教寺院景福寺は、200年以上の長きにわたり存続しベトナム仏教寺院としての特色を保持し続けている点で、タイ国内のほかのベトナム仏教寺院に比して異色の存在とも言えよう。<sup>19)</sup> その背景として、同寺が、19世紀から20世紀半ばに中国・東南アジア各地からの大量移民を受け入れた地に近接し、モノとヒトの絶えざる流入にさらされていたことがあげられる。「景福寺資料」には、19世紀から20世紀半ばにかけて中国からベトナム、経由地であるラオス・カンボジアからタイに至る移住者と彼らが携えてきたモノと思想が映し出されている。

18) 中国の上海・汕頭・福建・広東省高州府、カンボジアのプノンペン（南榮）、ベトナムのサイゴン・ハノイ、タイのバンコク（泰京・暹京）とその街路名がある。

19) 1978年に景福寺を調査した桜井は、バンコクに所在するほかのベトナム仏教寺院と比較し、同寺が、ベトナム音の読経に卓越する僧侶が住持し、越僑一世二世信者の支持を集めている例を挙げベトナム仏教寺院の伝統を残していると指摘している [桜井 1979: 77-78]。

参考文献

- Goscha, Christopher E. 1999. *Thailand and the Southeast Asian Networks of the Vietnamese Revolution, 1885–1954*. Richmond: Curzon Press.
- 石井公成. 2010. 「ベトナムの仏教」『漢字文化圏への広がり 新アジア仏教史10』石井公成（編），335–391 ページ所収. 東京：佼成出版.
- 片岡 樹. 2014. 「中国廟からみたタイ仏教論——南タイ，プーケットの事例を中心に」『アジア・アフリカ地域研究』14(1): 1–42.
- Kawashima, Midori. 2019. Papers and Covers in the Manuscripts Comprising the Sheik Muhammad Said Collection in Marawi City, Lanao del Sur, Philippines. In *The Library of an Islamic Scholar of Mindanao: The Collection of Sheik Muhammad Said bin Imam sa Bayang at the Al-Imam As-Sadiq (A.S.) Library, Marawi City, Philippines: An Annotated Catalogue with Essays*, edited by Oman Fathurahman, Midori Kawashima, and Labi Sarip Riwarung, pp. 173–204. Occasional Papers No. 27. Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University.
- 小峯和明. 2014. 「日本と東アジアの〈仏伝文学〉——『釈氏源流』を中心に」『仏教文学』39: 18–32.
- 劉春銀；王小盾；陳義（主編）. 2002. 『越南漢喃文獻目錄提要』（圖書文獻專刊7）台北：中央研究院中國文哲研究所.
- 宮嶋純子. 2020. 「近世ベトナム北部地域における仏典刊行事業」『関西大学東西学術研究所紀要』53: 155–172.
- 大西和彦. 1985. 「近世ベトナム仏教界と広州海幢寺」『佛教史學研究』27(2): 69–94.
- Poole, Peter A. 1970. *The Vietnamese in Thailand: A Historical Perspective*. Ithaca: Cornell University Press.
- 桜井由躬雄. 1979. 「研究ノート：在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア——歴史と文化』8: 73–117.
- . 1994. 「ベトナムにおいて新たに公開された漢籍史料について」『東方学』88: 158–166.
- 佐藤トゥイウエン. 2017. 『ベトナムにおける「二十四孝」の研究』東京：東方書店.
- 高津 茂. 2010. 「ヴェトナムの神勅に関する一考察——河東省懷徳府慈廉縣の史料を中心として」『共生科学研究』5: 34–51.
- Thanyathip Sripana. 2004. The Vietnamese in Thailand: A Cultural Bridge in Thai-Vietnamese Relationship. *Journal of Science: Social Science & Humanities* 3E: 49–64.
- . 2022. 『ベトナム人と安南派仏教（アンナムニカーイ）の来泰，およびラッタナコーシン王朝初期におけるワット・サマナーナムボーリハーンの建立』西田昌之（訳）. 日ASEAN超学際研究プロジェクトワーキングペーパーシリーズNo. 13. 京都：京都大学東南アジア地域研究研究所.
- 矢野正隆. 2016. 「ベトナムの神勅——九州国立博物館所蔵資料の概要と基礎データ」『東京大学経済学部資料室年報』6: 38–60.

(2022年5月25日 掲載決定)